イスタンブール日本人学校の勤務を終えて

前イスタンブール日本人学校長
更別村立更別小学校長　徳成達廣

1　はじめに

平成15年4月から平成17年3月までの2年間、イスタンブール日本人学校長として勤務した。イスタンブール着任後3日目にイラク戦争が勃発。11月には2度にわたる大規模な自爆テロが発生。厳しい環境の中の勤務であったが、元気一杯の笑顔で登校する子ども達に励まされながらの2年間だった。日本では決して体験できないさまざまな事件などから危機管理だけは自信を持ってみなさんに説明できる。また、学校経営では予算と人事のかなりの部分に関与できた。そのことから今後予想される校長の職務権限拡大について貴重な経験ができた。

2　トルコ共和国の概要

- 面積　約77万平方キロメートル（日本の約2倍）
- 人口　7,032万人（イスタンブールは1,003万人）2002年
- 首都　アンカラ（人口401万人）
- 民族　トルコ人85％　クルド人12％　アルメニア人ギリシャ人　ユダヤ人
- 言語　トルコ語（公用語）
- 宗教　イスラム教スンニ派95％　キリスト教　ユダヤ教
- 気候　ボスフォラス海峡とダーダネルス海峡を挟む、アジアとヨーロッパの接点にあり、中東地域ではイラン、エジプトと並ぶ大国である。イスラム教徒が大多数を占めるとは言っても、経済面を見ると、中東というよりは欧州のイメージが強い。イスタンブールやアンカラなどの大都市は、欧州の都市と比べても遜色がない。国土の大部分（97%）を構成するアジア側の地形は多様で、北の黒海沿岸を東西に走るポントス山脈と南の地中海沿岸を走るトロス山脈とに挟まれて中央部のアナトリア高原地帯があり、この南北の山脈が東部で合体して高山地帯を形成している。この東部地域の最大の火山が高度 5,165 メートルに達する聖書のいうアララット山（トルコ語ではアール・ダァ）である。西部では南北に走るたくさんの山脈が西に向かうにつれて段丘状に低くなり、エーゲ海沿岸地方に低い産地と平野が入り混じった地形を作っている。

黒海沿岸地方は年間を通じて雨が多く、りんご、チェリー、プラム、アプリコット、ヘーゼルナッツなどの栽培が行われ、エーゲ海から地中海沿岸地方にかけては典型的な地中海性気候のもと内陸部ではタバコ、綿花などが、南の沿岸部ではオレンジ、ぶどう、いちじくなどが栽培されている。中央のアナトリア高原では、夏は暑く乾燥し、冬は長く厳し

いステップ気候の地域で、耕地の大部分は降水量が少ない。また、ティグリスとユーフラテス両川の源流がある東南部の高原地帯は内陸性の亜寒帯湿潤気候に属している。国土のヨーロッパ側を含むボスフォラス海峡からマルマラ海にかけての沿岸地帯は平野が多く、植生は地中海的で黒海地方と地中海地方の中間地帯という性質をもっている

- 内政　　政体は共和国（1923,10,29～）元首はセゼル大統領（任期7年）、議会は一院制（550議席、任期5年）与党は公正正義党
- 政治　　トルコは、人口の 90%以上をイスラム教徒が占めているが、1923 年の共和国成立以来、政教分離を原則とした世俗主義を国是としてきている。これは建国の父ムスタファ・ケマル・アタチュルクの個性と信念が強く反映されていることは間違いないが、オスマン帝国時代にバルカンおよび中欧を領域とするなど、ヨーロッパとの関係が他のイスラム諸国に比べて深かったという地理的、歴史的関係も無視できない。
- 通貨　　トルコリラ　2004年に通過の切り替え　0が6個取れる。
- わが国との貿易　　日本からの主要輸出品目は一般機械、輸送機械、電気機械、金属品。日本の主要な輸入品目は食料品（冷凍、冷蔵マグロ），繊維製品、機械機器、原料品

3　イスタンブールの概要

イスタンブールが世界有数の都市として発展した最大の要因はその地理的条件である。北緯41度、青森県あたり。地中海気候の影響で雨が少なく、温暖。人口は約000万人で東京都と同じ。世界で唯一ヨーロッパとアジアの2大大陸にまたがって位置しているので陸路、海路の要衝にあり、東西文化交流の交差点でもある。ボスポラス海峡をはさんでヨーロッパ側に旧市街があり有名な史跡が数多くある。日本人の住宅や日本人学校もヨーロッパ側にある。日本企業40社が駐在し、在留邦人は870名である。（2004年10月）

4　　イスタンブールの暮らし

日本人はほとんどが新市街地区に住んでいる。安定した政治と発展する経済の影響で日常の生活物資も豊富に出回っている。日本食品もかなり出回ってきた。ほとんどのトルコ人はイスラム教を信仰しているが、ここイスタンブールでは酒類やタバコも手に入るし、飲むこともできる。しかし、一日五回の礼拝や断食などの宗教

的行事は欠かさずに続けている。イスタンブールの賃貸住宅は料金が非常に高い。ほとんどの派遣教員は日本人学校周辺に住んでいる。ボスポラス海峡に近く眺めの良い高級住宅街に暮らしている。交通事情のために派遣教員は車を持たない。タクシーやバスなどの公共交通機関を利用している。イスタンブールには地下鉄もある。トルコ人は非常に親日的である。日本人と答えるとほとんどのトルコ人は「私は日本が好きだ」と反応する。日露戦争の勝利、串本沖のトルコ海軍遭難への手厚い救護体制などがいまだに語り継がれている。地方都市に行くと串本通りまである。トルコは2003年11月の大規模な爆弾テロ以前は中近東におけるもっとも安全な国であった。しかし、テロ以後は中近東の中でもサウジアラビアに続く非常に危険な国になってしまった。このことは学校生活や日常生活に大きな影を落とすことになる。日本との時差は7時間。4月末から10月末までのサマータイムの間は6時間の時差である。豚肉はなく、羊肉、鶏肉、牛肉がある。鶏肉は廉価でおいしい。野菜や果物は年中出回っている。これも廉価でおいしいものばかりである。トルコ人は歌とダンスが大好きである。結婚式ともなると一晩中踊りまくる。職員でキャンプなどしても焚き火を囲んでは踊り始める。男女ともに若いうちは非常にきれいな容姿であるが、25歳を過ぎると急激に老け込んでしまう。世界三大料理の一つといわれるトルコ料理である。種類、味ともに豊富である。たっぷりとオリーブオイルを使う。紅茶と甘いものが大好きである。こうした料理や食生活の特徴が急激な老け込みの原因かもしれない。娯楽はショッピング、ゴルフ、釣り、映画、食べ歩き、遺跡めぐりなどがある。歴史的に非常に価値のある建造物が身近にたくさんある。またヨーロッパが近いので休暇に旅行を楽しむ人も多い。近代的な病院もあり、病気や怪我についてはさほど心配はない。しかし、大きな怪我や難しい病気はほとんどが日本で処置している。薬などもたくさんあるが、日本人にとって効きすぎることが多いので服用の際は少なめに飲んでいる。

5　日本人学校について

平成3年（1991年）現在地に開校した比較的新しい日本人学校である。大きい民家を改造した校舎のため、校地は狭い。体育館やプールなどはなく、外部の施設を借用して教育活動を行っている。小学部一年から中学部三年まである。児童生徒数は50人前後であったが、近年ボスポラス海峡トンネル工事のためか、60人を超える在籍者となっている。児童生徒の学力は高く、保護者の教育に対する関心は高い。派遣教員は10名。したがって教頭が担任を持つ。月額400ドルの授業料によって運営されている。現地採用教員が2名、事務が2名,ドライバー兼公務補、警備員が3名いる。運営委員会による運営である。運営委員は学校、総領事館代表のほかはすべて保護者の父親である。学校に対する熱い思いでボランテアで忙しい中、運営委員会の仕事とをしてくれる。治安対策では苦労が多いほかは、問題らしき問題はない。少人数指導が徹底している。そのため、学習の内容は室、量ともに高い。特色的な学習としてトルコ学がある。トルコ語だけではなく、

広くトルコについて学習を深めている。現地の学校との交流も続けている。日本人学校との交流を希望する学校が多数ある。

6　2年間の任期を終えて

二度目の日本人学校勤務である。最初のナイロビ日本人学校の経験で次は校長として日本人学校に行きたいという夢が15年間かかって実現した。イスタンブールが任地とわかったときには心が躍った。東洋と西洋の接点、そこにはどんな生活が待っているのだろうかと期待に胸が膨らんだ。2003年3月15日、成田からイスタンブールに向かった。翌16日無事にイスタンブール到着。しかし、19日にはイラク戦争が始まった。イラク戦争が早期に終結。ほっとしたつかの間11月15日と20日にイスラム過激派による2度、4件の爆弾テロが発生。死者60名以上、負傷者750名以上という大惨事が起こった。日本人の被害はなかったが、この事件を境にトルコは

中近東でもっとも危険な国になってしまった。毎日どこにいても安全対策ばかりである。大変なお金と労力をかけてもこれでもう大丈夫ということが見えない。底なし沼である。救われたのは子ども達の笑顔である。小さな子ども達が明るく元気な笑顔で登校してくる。何度その笑顔に励まされたかわからない。子ども達の持つすばらしい力を再認識した。妻も体調を崩し、日本に一時帰国した。元気なだけがとりえの私も二度日本に帰国して医者の世話になった。「いったい私は何のためにここに来たのだろう」と思ったこともあった。しかし、帰国して半年を過ぎた今、大きな試練を与えられ、多くの人の力をかりて潜り抜けたという実感でいっぱいである。まさに「人生、山あり、谷あり」である。教育者としてかけがえのない経験をつむことができたという感謝の気持ちである。